「主婦ズ・ナイト」

—2 稿—

2024/9/24/

米俵

〈人物表〉

小林　麻美　（43）　子供二人
田辺　かおり　（43）　バツイチ・子無し
桐野　綾　（40）　結婚歴なし

〈ログライン〉

麻美は、女風の検索をきっかけに、自分の息子が働いているのを見つけてしまう話

〈ねらい〉

・コメディを書く

1.

綾の部屋・室内（夜）

都内の分譲マンション。
小林麻美（４３）、田辺かおり（４３）が酒を飲んでいる。鈴木綾（４０）は机に突っ伏して寝ている。３人の周りには空けた酒缶やボトルが転がっている。
かおり、空になったグラスを強めに机に置いて、

かおり「本当！　カラっカラなのよ」
麻美「あー。ごめん、ごめん。気付かなかった」
と、かおりのグラスにお酒を注ぐ。
かおり「ちっがーーーう」
麻美、驚く。
かおり「喉じゃない。女、女としての渇き……」
麻美、虚空を見つめて、
麻美「ああ」
かおり「〝ああ〟じゃないよ。麻美も感じてんでしょ？」
麻美「何十年も前に諦めてる」
かおり「ちょっと！　私たちが掲げたもん忘れたの？」
と、麻美の肩をつかむ。
麻美、なすがまま、
麻美「繋げ」
かおり「それは中学！」
かおり、麻美を揺らす。
麻美、投げやりに、
麻美「不撓不屈ー」
香織、揺らす手を止め、
かおり「正解！」
かおり、麻美を煽るように、
かおり「いい？　女の性欲なんざ更年期前がピーク。これからピークを迎えんだよ？」
麻美、肩を回して、冷めたように、
麻美「ああ、そりゃ怖い」
かおり「危機感を持てー」
と、スルメを掴んで麻美の前に出す。
麻美、そのスルメを食べながら、

麻美　「はいはい」
かおり　「いいのか？　このまま死んで」
麻美、笑いながら、
麻美　「いや、死ぬって」
綾、突然起きて、
綾　「嫌ですね」
麻美とかおり、綾の方を見る。
かおり　「でしょ？」
綾、真顔で、
綾　「はい。普通に寂しいです」
麻美　「うーん……」
かおり　「おい、輪を乱すな。繋げー」
と、麻美の頭をこねくり回す。
麻美　「でも、旦那いるしなー」
かおり　「なんだ、マウントか？　相手いますマウントか？」
麻美　「違うって……そういうの全然だし」
かおり　「じゃあ、同じじゃ、道連れじゃー」
と、麻美を後ろから羽交い絞めにする。
麻美、かおりの手をほどきながら、
麻美　「だからって、相手どうすんの？」
綾　「女風（じょふう）とかどうですか？」
麻美　「え？」
かおり　「それだ、それ」
綾　「興味あったんですよ。セフレとも別れたし」
と、ノートパソコンを引っ張り出す。
麻美、動揺した様子で、綾を見て、
麻美　「えっセフレ？」
かおり、何も問題ないといった風に、
かおり　「綾、セフレいたんだ」
綾　「かおりさんいないんですか？」
と、パソコンを起動させる。
かおり　「別れた旦那とちょいちょいあったけど……あれはなんか違うな」
麻美、動揺した様子で、かおりを見て、

麻美　「えっ前の旦那？」
綾、キーボードを打って、
綾　「元旦那とか新鮮味ないっすよね」
かおり　「それな。だから枯れるし、渇く」
と、スルメを食いちぎる。
綾、画面を見ながら、
綾　「んー、女風あり過ぎですね」
かおり　「見たい見たい」
と、パソコンを覗き込む。
麻美、二人の間に割り込んで、
麻美　「ねー。ちょっと待って」
香織と綾、麻美を見る。
麻美　「ごめん。全然ついていけてない」
かおり　「大丈夫、大丈夫。とりあえず、女風で探そって話」
麻美　「いや、〝じょふう〟ってなに？」
かおり　「えっ、マジで？　知らない？」
麻美、頷く。
かおり、サイレンが鳴る様子を手で表しながら、
かおり　「重症患者入りまーす」
綾　「女性用風俗ですね」
麻美　「女性用？　風俗？」
かおり　「そう」
麻美　「ないない。そんなの利用しようとしてんの？」
かおり　「安全、安心、本番なし。マッチングよりいいと思うけど？」
麻美　「いや、そういう事じゃなくて」
綾　「でも、本番なしとか、逆にモヤるってことありますかね？」
かおり　「そこは相手次第でしょー。心が満たされるかどうか。そこが大事……」
と、胸に手をあてる。
綾　「まあ、試してみて――」
麻美　「違う、違う。（強めに）本番とかの問題じゃないって。二人の会話おかしいよ」

一瞬、静まりかえる。

かおり「（辛そうな声で）おっさんみたいな会話になってんのは悲しくなるよね」

綾「若い頃、散々嫌ってたやつ」

かおり「これがアラフォー？」

綾「そして、更年期へ……」

かおりと綾、顔を見合わせ、大袈裟に溜息をつく。

麻美「ごめん、ごめんって。でも、男を買うとか……」

かおり「うーん、買うっていうと、なんかね」

綾「お付き合い頂く？」

麻美「でも、風俗でしょ？」

かおり「まあ、百聞は一見にしかず。とりあえず、見てみよ」

綾「ですね」

かおりと綾、二人で麻美を挟む。

パソコンの前に三人。

麻美「いや、私はいいよ」

と、そっぽを向く。

綾、マウスを操作しながら、

綾「とりあえず、有名店ですかね」

かおり「変なのはいなさそうだよね」

ページを進めていく二人。

（画面）色白のかわいい系男子の笑顔の写真。

綾「あっ、この子可愛い」

麻美、チラッと見る。

かおり「ワンコ系だ。綾、好きそー」

綾、スクロールする。

（画面）スーツ姿の渋い男の写真。

かおり「私は、この人かな」

麻美、チラッと見る。

綾「なんか、前の旦那さんに似てません？」

かおり「うわー。無意識に選んじゃってんの嫌」

綾「新人とかどうですかね？」

かおり「えー、初めてはベテランのが良くない？」

綾「初心な発言」

かおり「おばさんの初心は駄目ですか？」
綾　「まあ、他店からの移動も新人ですから？」
かおり「それだ」
綾、新人紹介のページを開く。
麻美、チラッと画面を見る。
かおり、麻美の顔を固定して、
かおり「もう、素直になりなよ」
麻美　「いいってー」
と、言いながらしっかり見る。
（画面）新人紹介のページがゆっくりスクロールされていく。
麻美、急にパソコンを持って立ち上がる。
かおり、笑いながら、
かおり「ちょっと急に。見えんし」
綾　「麻美さん、まさか。ついに？」
麻美、クリックする。
食い入るようにパソコン画面を見る。
必死の形相。
かおり、麻美を見上げながら、
かおり「お気にいたの？　気になるんだけど」
綾　「いいと思いますよ。主婦でも利用してる人多いですし」
麻美　「（大声で）ちがーう！」
かおりと綾、麻美の声に驚く。
かおり「どうした？」
麻美、力なく、パソコンをかおりに渡す。
そのまま、ソファーに突っ伏す。
かおり、ページを確認する。綾も覗き込む。
（画面）新人の日記ページ。口元を隠した大学生の写真。
かおり「この子がどうした？」
麻美、クッションに顔をつけたまま、
麻美　「私の息子（よく聞こえない）」
かおりと綾「えっ？」
麻美、顔をあげて、

麻美　「私の息子ー」

かおりと綾「ええっ」

二人、再度パソコン画面を見る。

静まりかえる部屋。

外からサイレンの音が聞こえる。

麻美、クッションに顔をつけて、

麻美　「ああーっ」

（つづく）